

砂層をはさむような状態で観察されます。また、所によって小さな円レキを含んでいます。

㊸層は淡灰色をした粘土層で、㊶層にはさまれたような状態で観察されます。

㊸層は白っぽい小さなレキからできているレキ層で、レキの大きさは2 mm～5 mm大の円レキで、多くは流紋岩のレキです。

㊸層は㊸層にはさまるような状態でレンズ状に広がっています。色は白っぽく、粘土からできている地層です。

このがけで観察された地層の重なっている様子は、川原でレキや砂や泥の積もっている状態とよく似ています。流れの急な所にはレキが、流れの遅いよどんでいる所には泥がつもっているように、このがけの地層がたい積する当時、流速の変化があったことが推察できます。

このがけの地層は、会津一帯が中新世の海底時代に終りをつけて、陸化し始めた新第三紀の後期の鮮新世の当時、会津盆地西縁部はまだ低地の湖・沼の状態で、周辺から土砂が運びこまれました。その時期に積もってきた地層です。

## 2、地表の浸食（流水のはたらき）

校庭のグラウンドに降った雨は、より低い方へと流れ始め、それらの小さな流れが次第に集まって大きな流れとなって、グラウンドの土をけずって運びます。雨が止んだ後、雨水の流れたあとには、みぞができていることをよく観察します。



このがけをつくっている地層は、鮮新世の頃つもった堆積物ですので、まだ固結していないので、流水に浸食され易い性質があります。

写真はこのがけに見られる、流水のはたらきでけずり取られた様子です。